Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

「新民主義」に対する批判的考察 ： 「新民主義」という講演を中心に

彭, 程

(Citation)
鶴山論叢, 10:21*-39*

(Issue Date)
2010-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81002080

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002080

KOBE UNIVERSITY

「新民主義」に対する批判的考察

―「新民主義」という講演を中心に―

A criticizing to “XINMINISM”

彭　　程
Cheng PENG

【要旨】

「新民主義」は戦時下に中国華北地方の臨時政府にとっての指導原理であるし、新民系機構にとっての指導理念であり、「新民運動」にとっての指導理論であった。すなわち「新民主義」は日本軍による占領統治下の華北地方におけるイデオロギーでもある。本稿は「新民主義」と題した講演に基づいて「新民主義」の所論について考察し、次のようにその問題点を指摘したい。

独創性の欠如、「無頼哲学」、自家撞着・前後撞着、意味不明、概念の混淆と置き換え、論理性と現実性の欠如、強盗論理と投降主義、封建的・反動的性格、事実無根・出任せなどがあげられる。

以上の多くの問題点は叙述上と内容上という二種類にまとめられる。どの面から見ても、「新民主義」が日本の華北占領によって、華北における住民の反抗を和らげ、その円滑な支配を敷くために、急造されたものだと結論づけられる。

【キーワード】

華北地方、「新民主義」、批判、内容

【Key word】

North China, *Xinminism*, criticizing, contents

Ⅰ．はじめに

1937年７月７日に盧溝橋事件が勃発し、８月までに華北地方のほぼ全域が日本

軍の支配下に置かれることになった。そして同年８月に陸軍省は占領地域を統治するために、北支那方面軍（以下、方面軍）司令部を編成した。司令官に寺内寿一大将が、参謀長には岡部直三郎少将が就いた。寺内は方面軍特務部長の喜多誠一少将に対し占領地の管理を命じた[1]。この命令を受けた喜多は同年12月14日に北京で王克敏を首班とする中華民国臨時政府（後「華北政務委員会」）を樹立させると同時に[2]、この臨時政府をバックアップするための組織として新民会を発足させた。結成の際に、新民会はその指導理念としての「新民主義」を発表した[3]。その後「新民主義」は臨時政府の政治指導原理にもなった。臨時政府はこれに基づき、欧米思想の一掃、共産主義の排撃、三民主義の排除、そして「日支親善」の政治目的を推し進めた。政治目的達成のために臨時政府は華北地方に最大の発行部数を誇る新聞社となった『新民報』、「最高学府」といわれた「国立新民学院」、最大の会員数を有する経済協同組合に成長した「新民合作社」のほかに、「新民映画班」、「新民茶館」、「新民先鋒隊」などの「新民」と冠する機構と団体（以下、新民系機構）を次々に設立し、「新民主義」を指導理論とした「新民運動」を繰り広げた。

「新民主義」は臨時政府にとっての指導原理であるし、新民系機構にとっての指導理念であり、「新民運動」にとっての指導理論であった。すなわち「新民主義」は日本軍による占領統治下の華北地方におけるイデオロギーでもある。この意味において「新民主義」について研究することは、日本の華北占領政策と実態を解明する上で、極めて重要なことであろう。極言すれば、「新民主義」を抜きにして戦時下の華北地方を語ることができないということである。しかしながら、同じく「満洲国」の傀儡政権が打ち出したイデオロギーである「王道楽土」の研究に比べると「新民主義」の研究は大変立ち後れていると言わざるを得ない。

「王道楽土」については、日本学界で長きにわたって活発な研究が行われ、過去に激論が交わされてきた。この「王道楽土」の解釈をめぐる議論は「空疎な美辞麗句」と「見果てぬ夢」に二派に分けられて展開され、後者の解釈を侵略を正当化する態度の表れであるとする批判が再び盛り上がってきている。解釈の正統性の問題はさておき、少なくとも「王道楽土」に対する研究は幾多の研究者により十分になされ、相当な研究成果を収めていることは先行文献から窺い知ることができる。この「王道楽土」の研究とは対照的に、華北地方の支配を正当化するために打ち出された「新民主義」を知る人は極わずかで、「新民主義」を共産党による「新民主主義」と混同する人さえ少なくない。これは、もともと占領期間が短く資料が少ないことに加えて、敗戦時の戦闘に伴う焼失が指摘されてい

る[4]。

「新民主義」についての研究は他のイデオロギーに対する研究と同じく、その形成・策定、中身・所論そして伝播・影響に区分される。さらに時代区分によって戦時下におけるイデオロギー研究と戦後の研究に分けられる。

戦時下の研究では、日本の文化人によってなされたものとして、藤澤親雄の「新民主義の哲理的基礎」[5]、瀧川政次郎の「我観新民主義」[6]、大沼喜久男の『新民主義の理論と其展開』などが挙げられる[7]。中国の文化人によってなされたものとしては、繆斌の『新民主義』、『新民主義講演集』、『由新民主義批判三民主義』などがある。以上の著者はいずれも占領当局と何らかの関わりがあった人物であり、たとえば瀧川政次郎は国立新民学院の教授を、大沼喜久男は北支那方面軍司令部顧問を、「新民運動の理論家」と呼ばれた繆斌は新民会中央指導部長をそれぞれ務めていた。しかも、彼らの著書の意図はいずれも「新民主義」の解釈を「研究」し、これを宣伝、普及させるところにあり、内容的には学術上の研究として認められるものではない。つまり、彼らの著書と文章は先行研究というよりも、むしろ研究の対象であるといった方が妥当な評価であったかもしれない。

戦後の「新民主義」については、新民系機構の組織である新民会、『新民報』、国立新民学院等の活動に主に焦点を当て分析が進められてきた。「新民会」の研究については、八巻佳子の「中華民国新民会の成立と初期工作状況」[8]と堀井弘一郎の「新民会と華北占領政策（上、中、下）」[9]などがある。『新民報』については陳昌鳳・劉陽の「『新民報』に関する研究」[10]と「『新民報』に関する研究（続き）」[11]という論文がある。国立新民学院については、島善高の「国立新民学院初探」と題した論文を一篇見つけることができた[12]。最近では「新民主義」の策定過程をテーマとする彭程の「新民主義の成立過程について」が見られる[13]。

以上からわかることは、これまでの「新民主義」に関する戦後の研究は「新民主義」の伝播と影響に重心を置いて行われてきた。「新民主義」の策定過程は彭程の論文によってかなり解明されてきた。しかし研究の中で重要な位置づけにある「新民主義」の中身、すなわち「新民主義」が一体どういうものであろうかについて、これまでになされた研究が見当たらず、これを解明することができれば、「新民主義」の研究を前進できると考える。

本稿が対象とする研究はこれまで空白に近い「新民主義」の内容に焦点を絞り、それを明らかにすることである。以上の先行研究を踏まえ、当時の出版物を参考にして外務省外交史料館、国立公文書館に所蔵されている公文書を多用することとする。

Ⅱ.「新民主義」の内容

先ほど述べたように、「新民主義」が登場してから、繆斌をはじめとする中国人文化人と、大沼喜久男をはじめとする日本人文化人は様々な「解釈」と「説明」を加え、まるで一大理論になったようである。これらの解釈と説明に当たる本と文章が数多く残っているだけではなく、その間に相矛盾する内容がよく見られる。したがって、本稿はこれらの本と文章の流れを遡り、その源として新民会の成立にあたり、「新民主義」が正式に登場したことを示した「新民主義」を題とする講演を研究対象とする。

1937年12月24日に開催された新民会の結成会合の席上、その中央指導部長を務める繆斌は「新民主義」という講演を出席者の前で行った[14]。ここで「新民主義」は産声をあげ、新民会の指導原理としてが正式に公認されることになった。「新民主義」と題した講演は９ページに及び、紙面の関係でその内容を一々列挙することができず、以下にいくらかの紙幅を割ってその要点を摘記する。もしその全文を参照しようとすれば、国立公文書館に所蔵されている「外事警察報第188号」という資料[15]、および『東亜』1938年の第１期に載せられた「新民主義」を参照してください[16]。

「新民主義」という演説は「新民史観」、「新民主義の実行」、「結論」という三部分から構成されているものであり、以下にそれぞれ論じていきたい。ちなみに、叙述の便宜を図るために、２の「甲乙」のような分け方以外は、その番号がすべて筆者がつけたものであると断っておく。

１.「新民史観」

「新民史観」は別名が「新民主義の理論」であり、「新民主義」の綱領にも当たり、その要点を次のように抜粋しておく。

①　新民主義は我が人類生存の自然法則である。

②　抵抗力ある者は生存し得、抵抗力なき者は必ず滅亡する。…優者、善者は道に適ひ、自然の法則に順応するものであり、劣者、悪者は道に適はず、自然の法則に違反するものである。人は万物の霊長であり、その抵抗力は最も大きい。

③　人類の歴史は一の動力と反動力の相生じ相剋するの歴史である。動力と反動力の平衡する時は、道に適合し、自然の法則に順応する故平和が得られる。

④　一旦動力と反動力がその均衡を失へば、直に困難な状態が起る。たとへば

水に高低あれば奔流となつて流れる如く戦争が起る。故に戦争とは、不平なるものを平ならしめ、不和なるものを和ならしむるものである。不平なるものを平ならしめ、不和なるものを和ならしめ得ざれは、真の平和の説ではない。

⑤　故に人類進歩の歴史は一直線の進歩にあらずして、循環或は前進して止まざる進歩である。

⑥　西洋文化の長所を採用しないのではない。…事毎に西洋を模倣すれば、東方は西方に欺かれるであらう。東方には自ら東方の美徳あり、且つ世運変化し、東西洋文化は百余年の消長を経てまさに再び東方文化の繁明期たらむとしている。東方人類はまさに我が東方固有の文化によつて善を択んで之を固執し、以て西洋文化の衰頽を矯正せんとしている。

⑦　いはゆる明徳を天下に明にするとは、天地人三才の道を明かにし、一以て之を貫くことである。これ即ちいはゆる王道である。字の意義は上の一画は天、下の一画は地、中の一画は人であり、一直画を以て天地人の三才を貫通している。人は天地の気を受けて生れたものであり、故に天地と渾然一体をなす。王字の中間の一直画は人身に血脈あるが如きものである。故に新民主義は王道を実行するを以て志とする。

２.「新民主義の実行」

以上の「新民史観」は「故に新民主義は王道を実行するを以て志とする」というその目標を述べて、次にはその「実行順序」、いわゆる「格物、致知、誠意、正心、修身、斉家、親郷、治国、平天下」の九項を見てみる。

甲＞格物：格物とは何であるかといふと、去私といふことである。

乙＞致知：物欲の私が既に去り、天心が人心と一貫すれば、人の知識は良知（良知、致良知ハ王陽明ノ観念ナリ――ママ）の域に達し得る。

丁＞正心：善を択んで之（至誠無息の精神　筆者）に固執することである。

戊＞修身：修身とは、…単にその形体を修めることではない。…人格を修めることである。

⑴　今の資本家は個人の自由主義により、貪欲にして不正の富を蓄へ、労働者を圧迫する。…今の労働者はただ時間をへらし、工賃を増し、資本家を打倒することのみを念とする。

⑵　人既に智愚賢不肖の区別ありとすれば、富貴貧賤も亦免れ難いところであ

る。

己＞斉家：父子、兄弟、夫婦は各々その分あり、之を斉といふ。

⑴　西洋の個人主義より男女平等の説が発展した。平等の説より男女は権利義務すべて等しいといふ誤解が生まれた。これ実に天理人性に違反するものである。

⑵　政治は男子の事である。女子にして政治に干渉するは従来我が東洋道徳の許さざるところである。…我国の歴史を通観するに、凡そ婦人が政治に当たれば必ず乱れる。いま我国は不幸にして宋氏の三姉妹が政治に干与し、国家をして一片の焦土と化せしめたのは明らかな例である。

⑶　中国の家族主義は数千年を経ても失墜せず、…いま中国は四億の人民を擁しているが姓氏は数百に過ぎぬ。

庚＞親郷

⑴「親郷」は『大学』中には漏れているが、老子の道徳経には明かに述べられている。

⑵　政府と人民は漸次圧迫階級と被圧迫階級の分を形成した。

辛＞治国：治国の道は固より政教合一にあるが、しかし単なる善は政治といひ難い。

1　礼治主義

⑴　欧米の代議制度（二政党以上、筆者）は真の民意が塞がれるに至る。

⑵　一党専制は、ソヴィエート・ロシアの共産党専政、イタリーのファシスト専政、独逸のナチス専政、更に現在中国の国民党専政の如きである。…独逸の如きは、国運日に上昇している。…スターリンの独裁は蘇連の人民を尽く犬馬とし、生活の余地たからしめた。蒋介石の独裁は中国の人民を塗炭に苦しめ、全国の財産を焦土と化した。

⑶　いま吾人の新民主義は治国の道に於て先づ礼治主義を提唱する。

⑷　家に家長あつて一家の人聴き、郷に郷長あつて一郷の人聴く。

2　徳治主義：官吏は人民よつて選出され、しかも官吏は必ず人民に教ふるのが徳治主義である。既に官吏があり、しかも教師である。これ政教合一の道である。

⑴　政治家は高く人民の上に居り、一言一動はすべて天下人民の法則である。

⑵　父は国民党、子は共産党、国共聯合せざるときは父子仇敵となり、人倫の道も失つた。

3　生産主義

⑴　吾人は都会と農民の畸形状態を矯正せんと欲し、工業の農村化を主張する。…生産機械の農村への分散を主とする。

⑵　新民主義の生産主義は、近代的生産工具による男耕女織の社会を達成し、自給自足を実理せんと欲するのである。

⑶　新民主義の生産主義に於ては、その土地問題の解決は分田の制を採用するにあらずして地利の開発と生産の増加にあることを主張するにある。

壬＞平天下

⑴　国家間でも満腹国と空腹国の区別がある。この土地の不均等が現在の乱世の原因である。…土地の分配は、人々が均等に之を得ることは出来ず、諸国も均等に之を得ることが出来ぬ。

⑵　土地の所有は、吾人は有徳者に帰属すべきものなることを主張する。個人然り、国家また然り。

⑶　土地の生産を高め人を養ひ得るものが有徳者であり、有徳者が土地を領有する。されば敗家の子はその産を失ひ、敗国の政府はその土地を失ふ。これ優勝劣敗の天理である。いま天下を平治せんと欲するならば、天下の土地を天下の有徳者に還付せねばならぬ。これは王道天下の大義である。

⑷　いま民族主義、国家主義などと唱へ、徒に自尊して争ふは狭義も甚しい。新民主義は文化の相同じきものが同盟を結ぶことを主張する。日本、中国、満州の如きは聯盟を結び得る。

３．演説の「結論」

以上では「新民主義」の主な論点と所説を触れ、以下にはその締めくくりを抜粋する。

㈠　新民主義は新民史観を以つて基礎となし、人類の歴史の進歩が一の循環式なる善悪の消長にあることを認め、善を択んで之に固執するの精神に基いて王道を実行するものである。

㈡　中国は西洋思想の侵入を受くること百年に近い。…蒋介石が政権を握るに及んで、東方文化は之がためにほとんど完全に喪失した。

㈢　今は共産党と結び、東亜の赤化を顧みずして抗日を事とし、一人一党の私利のために人民財産を犠牲として惜しまず、誤れる焦土政策を唱へて居る。

㈣　我が友邦日本は義に仗つて師を興した。これ正に弔民伐罪の挙である。さらにまた東方文化の復興を提唱せるは正に四億人民の渇望するところであらう。

㈤　種族と国界とを分たず、教あつて類なきを提唱し、狭義の民族主義と国家主義に反対する。日満華の連盟を主張し、進んで大亜細亜連盟を作り、然る後万邦と協和し、以て王道天下の理想を達せんとする。

Ⅲ.「新民主義」の問題点

以上からは「新民主義」の所論を大体把握することができる。その問題点について、次のように箇条書きであげられる。

1．独創性の欠如

新しい政治理論として、「新民主義」はオリジナリティが欠けるとまず指摘しておきたい。新政治理論にとってはどういう新主張、新理念を掲げるかが一番重要なことであるが、「新民主義」という講演からはその独創性が見られない。

庚の⑴の「『親郷』は『大学』中には漏れている」と「新民主義」も自ら認めたように、「新民主義」のいうところの「実行順序」の九項の中で、「親郷」のほかに他の八項が既に中国古典の『大学』にあった。さらに、この八項に対する釈義は以下のように故意的に誤って改めた部分以外に、『大学』とほとんど変わらない。

また、辛のような国を治める三手段、つまり「礼治主義」、「徳治主義」及び「生産主義」の中の「礼治主義」、「徳治主義」は明らかに儒家思想の復刻に過ぎず、「生産主義」はいわば儒家思想と近代資本主義経済理論の結合だけである。

今回の演説を通覧すれば、「新民主義」の名義下に、下記のようにマルクス主義、社会進化論、近代経済理論、儒家や道家などの中国古典哲学の所説をまぜって取り入れ、新しい主張が一つでも見られない。これに対し八巻は「政治経済理論としての独創性はない」と一括した[17]。

2．「無頼哲学」

台湾における高名な中国古典研究家南懐瑾は、宋代の理学家が仏教の要素を密かに汲み入れたにもかかわらず、まだ仏教を攻撃したことを「無頼哲学」と表現している[18]。「新民主義」もこの手法を以て西洋文化を取り扱うのではないだろうかと考える。

①は「新民史観」の冒頭に置かれ、いわば「新民主義」の位置づけであるが、「人類生存の自然法則」は社会進化論から来たものである。その後②のように続々

と語り、社会進化論の観点と要素を汲み入れたことは紛れもない。南懐瑾が指摘したように、他者の長所を汲み入れるそのことは問題がなく、無断で我が物にするのは問題が生じてくるが、まだ大した問題ではない。しかし他者の長所を取り入れたにもかかわらず、まだ他者を攻撃するのは大問題である。「新民主義」は西洋文化に属する社会進化論の観点と要素を汲み入れたにもかかわらず、まだ西洋文化を攻撃することはこの類である。

⑦のように、「西洋文化の長所を採用しないのではない」と述べ、「新民主義」は対外に閉鎖的な理論ではないというイメージを与えようとしたが、終始にこの一文に留まり、その後何倍もの字数を使って西洋文化を批判した。実は、今回の演説を通覧すれば、西洋文化の長所に一つも触れなかった。後述する「西洋文化の衰頽」というように、西洋文化を激しく批判する反面、「いま吾人の新民主義は、東方固有の文化の復興を提唱する」というように東洋文化を顕揚しようとしたのは「新民主義」の基底だといえる。

また、中国古典哲学思想の中では、循環往復の思想があり、例えば、「終則復始、極則復反」、「治乱循環、陰陽動静之極也」などの論述があるにもかかわらず、⑤のような循環前進の思想がなかったのである。循環前進の思想は最初にヘーゲルが『論理学』で提出し、エンゲルスがまとめ、明確化したものである[19]。現在唯物弁証法の三大法則の一つとして[20]、マルクス主義の柱の一つともいえる。「新民主義」がマルクス主義を謗りながら、その思想を密かに借用することは「無頼哲学」にほかならない。

３．概念の混淆と置き換え

「結論」の㈠の「善を択んで之に固執する」は「新民主義の実行」の丁に既に出現し、それは「正心」の定義に当たり、実現順番の一つとして取り上げられたが、ここで指導精神として再登場し、前後では「正心」という概念の一貫性に欠けるのである。

社会進化論は生存力の強弱により優劣を区分し、すなわち強＝優、弱＝劣を明らかにしたが、善＝優、悪＝劣という認識を示していない。②のような善＝優、悪＝劣という等式が何の根拠も示さず、何の解釈をかえず作者によって勝手に作られたものといわざるを得ない。

⑦の「明徳」が中国古典の『大学』から引用したものである。原文は「大学之道、在明明徳、在新民、止於至善」であり、「明徳」について朱熹は「明徳」を「性」と見なす一方、王陽明は「心」と見なす。両者の間に食い違いが多少あるものの、

いずれも「虚霊不昧」と釈義した。他方、「天地人三才」という言葉が四書五経の『易経』から来たものである[21]。「天地人三才」が「天」、「地」、「人」を指し、「天」があれば「地」と「人」があるという内在関係を有する。そして、「地道」と「人道」が「天道」に従属し、「天地人三才の道」が自然界、人間社会の運行と発展規律、及びその相互関係を指す。「明徳」と「天地人三才の道」は性格が完全に異なり、強いて言えば、「明徳」が「天地人三才の道」の「人道」の一部分に過ぎず、「天地人三才の道」で「明徳」を解釈することはできないのみならず、本末を転倒するといわざるを得ない。

次の「王」と「王道」はまったく性格の異なる概念であり、「新民主義」は「道」という言葉を見捨て、「王」字の意味だけで「王道」を注解することがなかなか成り立たない。「王」の起源に対して里見岸雄は『支那王道論』の中で、「現在の『王』といふ字は、もと、玉といふ字と同じで、玉の古形は王であつた。横の三線は石を表し竪の一線は緒を象れるもので、三は大数の代表として、石を三箇示した象である」と釈義している[22]。さらに、里見は『説文解字』の注を借り、「王ハ天下ノ帰往スル所ナリ、董仲舒ノ曰ク、古ノ文ヲ造ル者、三画シテ其中ヲ連ネ、之ヲ王ト謂フ、三ハ天地人ナリ、而シテ之ニ参通スル者ハ王ナリ、孔子ノ曰ク、一、三ヲ貫クヲ王ト為ス」と解釈した[23]。言い換えれば、横の三画が「天」、「地」、「人」を表し、竪の一線が「道」を表し、「道」で「天」、「地」、「人」、すなわち「三才」を貫通したのが王である。さらに、「王」が「往」の借字であり、両者が相通じ、天下があそこに帰往することを意味する。つまり、「王」が天、地、人の道を貫き、「天人合一」に達し、天下が帰往するものを指す。「新民主義」は「王」を釈明する際に、儒教古典における「天地人三才」の思想を取り入れる一方、「天下帰往」の意味を任意的に切り捨ててしまった。

「王道」については、もちろん辞書を含める解釈が多種多様である。その整った理論として、里見岸雄は「王道の総合的体系」を構築し、「王道の性格三綱」（王道絶対、王道貫普、王道無偏）、「王道の基本三綱」（王道則天、王道孝慈、王道修身）と「王道の政十三綱」（王道内省、王道徳治、王道名分、王道教化、王道礼楽、王道祭祀、王道政刑、王道文武、王道厚生、王道天下）に細分している[24]。これが少し煩瑣だと考え、儒教経典に戻り、その本義を探してみよう。孟子はその著名な政治評論文――『孟子・梁恵王・上』の中で、「養生喪死憾ミ無キハ王道ノ始メナリ」と述べた[25]。さらに、漢代劉向は「王道とは砥石のようなもので、人情に発し礼儀として表現される」という明確な定義を下した[26]。つまり、大体王道の本義は清廉な政治と高い社会倫理道徳からなり、寛容仁愛で治国

する正道であると思われる。以上を見てわかるように、「王道」は一専用名詞として、決して「新民主義」でいわれる「王＋道」という簡単な組み合わせではない。

４．自家撞着・前後撞着

己の⑶は、「中国の家族主義は数千年を経ても失墜せず」を論証するために、「いま中国は四億の人民を擁しているが姓氏は数百に過ぎぬ」を論拠として挙げられた。しかし、日本は約7000の苗字を擁しており、その数が世界でも多いと言われる[27]。論者の理論に従えば、当時中国の見本と位置付けられた日本はもはや家族主義が失墜したのか。

辛の３では工業を発展させると強調した。一般的に工業を発展することを工業化という。工業化とは「農業社会から工業社会への転換」を指し、その特徴は次のようにある。

①　農業などの第一次産業から工業などの第二次産業へと労働人口が移動する。
②　自給自足的なそれから市場的交換経済を前提としたものへと変化していく。
③　親族集団の解体と農村共同体の崩壊が進み、核家族化、大衆社会化などが進んでいく[28]。

このため、⑴の「工業農村化」はその目的と手段の乖離を示し、「生産機械の農村への分散を主とする」には根本的に言えば、木によって魚を求めるにほかなるものではない。また、工業を発展させればさせるほど、「礼治主義」「徳治主義」という封建統治方法の施される土壌が失われつつある。さらに、辛の３の⑵では、「近代的生産工具による男耕女織の社会を達成し、自給自足を実理せんと欲するのである」という一文は「工業農村化」のように、近代的生産工具をもって古代的家庭構図をなそうとし、いわば二律背反的であるといわざるをえない。

５．語意不明

②と③は「道」を言及したものの、「道」が何だかについて解釈を少しも加えない。周知の通り、中国古典の中で「道」は意味が極めて多く、例えば、「道路」（「復有道、何其咎」）、「規範、法令」（「無有作好、遵王之道；無有作好、遵王之路」）、「規律」（「所謂道、忠於民而信於神」、「宇宙の本源と普遍規律」（「道生一、一生二、二生三、三生万物」）のような古典的な意味を有するほかに、近代的な意味として「方法」、「学問・技芸」、「語ること」などの意味がある。これほど多い意味に対して、「新民主義」のいわれる「道」はどれに当たるかわからない。

⑦の「王字の中間の一直画は人身に血脈あるが如きものである」が文中にいきなり差し込まれた。これまで述べた横の三線が「上の一画は天、下の一画は地、中の一画は人であり」と解釈したが、「人身に血脈あるが如きもの」は「天」、「地」、「人」を貫けるだろうか。一方、儒家古典ではこの一直画を「道」と解釈し、たとえば、南唐の徐楷が「説文繫伝」の中で「居中也、皇極之道也」（真ん中に位置するのは、皇極の道なり）と論じた[29]。面白いことには、「道」を多く使う「新民主義」はこの肝心な意味を見逃している。

「結論」の(5)の「教あつて類なき」は教育畑の専門用語であり、「誰でも教育を受けられる」という解釈が定着しており、なぜここで使われるかが理解に苦しむ。

6．論理性と現実性の欠如

③の「道に適合し、自然の法則に順応する故平和が得られる」という文に対して、その因果関係が一切分からない。人間が「道」に従うべきかどうかについては、中国先賢の中で範蠡が最初に論及した。彼は「夫人事必将与天地相参、然後乃可以成功」と述べた[30]。ここで範蠡のいわれた「天地」が「天地の道」であり、つまり各種の規律を指す。言い換えれば、人間が「道」（規律）に順応すれば、成功に導くことができる一方、「道」（規律）に違反すれば、失敗を招くことを意味する。「道に適合し、自然の法則に順応する」としたら、「平和が得られる」に至ることができるかどうか、範蠡だけではなく、中国の先賢達は誰一人でも論じていなかった。「道」と「平和」との関係について、範蠡は論じなかったにもかかわらず、「道」と「戦争」との関係について論じた。「古之善用兵者、因天地之常、与之倶行」とある。ここで「天地之常」が「天地の道」に当たり、つまり、戦争の規律に適応すれば、戦争の勝利を収められることを指す。この思想の延長線に立つものとして、客観的規律を重んじることは現代社会の常識として定着している。いくら解釈しても「道に適合し、自然の法則に順応する故平和が得られる」という文は論理性に欠けていることが判明した。

④の動力と反動力は一体何を指すか不明だけではなく、どのように両者が均衡を失うか、逆にいえばどのように均衡を保てるかについて「新民主義」は触れなかった。「水に高低あれば奔流となつて流れる如く」という比喩はまったく意味不明である。「水が低いところに流れる」ことは一般に自然の趨向、或いは客観法則を喩える一文であり、ここでは前後の文と全く逸脱したといっても良い。強引に言えば、二つの推測ができると考えられる。一つは恐らく動力と反動力が均衡を失えば、双方は力の強弱が現れてくるにつれて、強力な一側が弱小な一側に

攻撃を加えることが自然的であろう。もう一つは、戦争は勢いが水の奔流と同じく、そのもたらした損害が不可避だと主張しようとするかもしれない。一つ目は強盗論理にすぎず、二つ目は完全に前後の文脈から逸脱してしまったといわざるを得ない。さらに、後ろの「故に」の原因が少しも見当たらない。

⑦の「人は天地の気を受けて生れたものであり」という一文が『朱子語類』から写し取ってきた。原文では「天地大徳曰生、人受天地之気而生、故此心必仁、仁則生矣」とある[31]。この文は本来朱熹がなぜ誰でも心の中で「仁」を持っているかに対する解釈であった。後ろの文は「故に天地と渾然一体をなす」に次ぎ、これが道家の思想であり、人間と自然との一体性を強調した。この両者の間にどういう繋がりを持っているか不明である。

次の「故に新民主義は王道を実行するを以て志とする」という一文が一層分かりにくくなる。ここでの「故に」がどういう故であろうか。前句の「王字の中間の一直画は人身に血脈あるが如きものである」という原因であろうか。或いは中途半端の「天地と渾然一体をなす」であるか。両方とも因果関係が見当たらない内に、曖昧に「新民主義」の目標として出された。

㈡は本末転倒だといえる。確かにその百年以来、中国は西洋思想を多く取り入れ、いわば「西風東漸」であるが、最初の一短時間以外に、ほとんど受身的な侵入より能動的な吸入といったほうが当を得ているだろう。それによって「東方文化」は恐らく一定の衰えになった（絶対「完全に喪失した」ではない）かもしれないが、20世紀の初頭に梁啓超は名高い「新民説」の中で、「東方文化」に拘り、没頭することを激しく批判し、そうしたら「新民」になり得ないと指摘した[32]。「新民説」の提出した半世紀後、「新民主義」はまだこの論調を持することは歴史の退歩としか看做されない。また、日本も西洋文化を積極的に汲み入れているが、それは「侵食」だといえるか。さらに、蒋介石は民族主義者だと公認され、中国伝統文化の発揚を呼びかけていたことは蒋介石の一生を貫き、日中戦争下に蒋介石の発動した「新生活運動」がこの具現である[33]。「東方文化」の衰えが蒋介石によることであるという結論がなかなか成り立たない。

なお、同じ政党政治であるにもかかわらず、辛の１では、⑴は代議制度を激しく批判した反面、⑵は一党専制を一概に攻撃しなかった。論者は説明せずして一党専制のナチスドイツの国運が日に日に上昇していると主張する一方、共産党ソ連と国民党蒋介石政権に批評の言葉を尽くした。この結論はおそらく政治制度自身を問わず、日本との関係、つまり日本の味方或は敵によって、つけられたものだと考える。

「生産主義」の⑶では「その土地問題の解決は分田の制を採用するにあらずして地利の開発と生産の増加にあることを主張する」とあり、これは如何に具現できるか、空洞的なスローガンしかない。さらに、分田の制は「地利の開発と生産の増加」との間に、相容れないどころか、むしろその肝心な手段の一つだと思われる。

7．強盗論理と投降主義

④では「戦争とは、不平なるものを平ならしめ、不和なるものを和ならしむるものである」については、その定義が正しいかどうかは別に、「不平なるものを平ならしめ」が何を言おうとしたのか。日本による累次の侵略と不平等条約の強要という当時の事情を考えれば、不平を抱くもの、つまり「不平なるもの」はもちろん中国である。どう「不平なるものを平ならしめる」のか、前後の文から見れば、戦争を通して「平ならしめる」だろうと推知できる。いうまでもなく、これが強盗の論理にほかに何ものではない。後ろの「不和なるものを和ならしむる」が同然である。

また、「不平と不和が存在すれば、真の平和の説ではない」という文が荒唐無稽である。世の中では複雑であるから、その立場と見方により物事に対する不平を抱き、両者の間柄が不和だということは取り立てて珍しいことではない。「新民主義」の論理に従えば、この状況が生じてきたら、強い一方がすぐ弱い一方を殴り、或いは戦争を加え、勝利を収めてから、その不平と不和をなくし、世界が平和に帰することができるということである。しかしこの「平和」は一部分の人が暴力を以てもう一部分の人を支配するばかりではなく、被支配者が不満と不平を抱く権利さえ剥奪され、奴隷社会にも及ばない社会といえよう。

なお、戦争によってもたらされる平和がその手段と目的の乖離を示し、押し付けられた平和、すなわち不平等な平和が「真の平和の説ではない」のである上に、被支配者では誰一人でもこの平和にあこがれないわけである。この論理は強盗論理の典型である。

講演の進行につれて、強盗論理はその激しさを増した。壬の所説は完全にヘ理屈に落ち、日本侵略を正当化する口実の極みだと言っても過言ではない。文字通りの「売国主義」と「奴隷化主義」であり、その理不尽に対しては子細に及ばない。

「結論」の㈢は日本同盟の立場に立って、徹底抗戦に当たる「焦土政策」を批判し、つまり自分が投降した上に、国民政府に投降を勧め、赤裸々な「投降主義」、

「売国主義」と見てもいい。㈣は黒白混淆であり、敵を味方と取り違え、敵に仕えるとしかいえない。

㈤「狭義の民族主義と国家主義に反対する」ことは㈢と㈣の発想が一様である。次には肝心な満州国の承認を打ち出し、日本の唱えていた「大アジア聯盟」と歩調を合わせたのである。

８．封建的・反動的性格

己の⑴では、「西洋の個人主義より男女平等の説が発展した。平等の説より男女は権利義務すべて等しいといふ誤解が生まれた。これ実に天理人性に違反するものである」とある。周知の通り、1870年代に「女性解放運動」の第一波としては西欧において大いに「リベラル・フェミニズム」が行われてきた[34]。その後、男女平等、男女同権などが近代文明の一つとして、工業化と近代化の進展に伴い発展してきた。今日世界中にほとんどの国が男女平等、男女同権を認めた上に、立法して保障を加えている。

辛の２の⑴では、「政治家は高く人民の上に居り、一言一動はすべて天下人民の法則である」とある。現代政治の理論と実践は、「監督無き権力は権力を腐敗の権力に導く」ことを繰り返し証明している。政治家が雲の上におり、人民をよく管理することは空想にすぎず、近代政治文明を見捨て、封建社会以前の社会に後退すると言わざるを得ない。

引き続き辛の１の⑷では、「家に家長あつて一家の人聴き、郷に郷長あつて一郷の人聴く」とあり、確かに⑴と⑵の指摘された政党政治の短所が的中したかもしれないが、これは一党専制から君主専制に後戻りし、その弊害がより多いと思われる。

９．事実無根・出任せ

己の⑵では、「我国の歴史を通観するに、凡そ婦人が政治に当たれば必ず乱れる」とある。確かに中国歴史上ではそのケースがあり、例えば、漢代の呂太后、北魏の馮太后、清朝の西太后などがこの類である。しかし中国では皇室の血統を保つために、幼帝を立てる場合が多く、その存命する保護者に当たる太后は政治を関与し、新旧交替の際に繋ぎの役割を果たさなければならない。このため、決して「新民主義」の使われる「必ず」のように一概に論ずることができない。例えば、漢代の馬太后、遼代の蕭太后、明代の張太后、清朝の孝庄太后など政治に当たる婦人が賢明であると定評されている。つまり、性別を政権に当たる前提のひとつ

と扱うという考え方は短絡的で、時代逆行的であると考えられる。

次には、「いま我国は不幸にして宋氏の三姉妹が政治に干与し、国家をして一片の焦土と化せしめたのは明らかな例である」とある。確かに宋氏の三姉妹は特殊な地位を生かし、中国政治に一定の影響を及ぼしたかもしれないが、深く関与したに至ると言えない。「国家をして一片の焦土と化せしめた」が事実であるかは別にして、少なくとも日本による戦争からもたらしてきた結果であり、宋氏の三姉妹との関係が薄いと考えられる。

辛の２の⑵にいわれる「父は国民党、子は共産党、国共聯合せざるときは父子仇敵となり、人倫の道も失つた」は荒唐無稽であり、批判より痛罵めいた口調を使い、理論として提出する資格まで問われるに至る。

Ⅳ．おわりに

以上では「新民主義」の三構成部分を点検し、その主な論点を選び出した上に、批判を加えた。この多くの問題点は叙述上と内容上という二種類にまとめられる。叙述上では、語義不明、論理性の欠如、概念の混淆と置き換え、事実無視と出任せなどが列挙される一方、内容上では、無頼哲学、強盗論理、封建的・反動的性格、非現実性、独創性の無き、自家撞着などの欠陥がある。これらの問題点からは、「新民主義」が日本の華北占領によって、華北地方における住民の反抗を和らげ、その円滑な支配を敷くために、急造されたものだと結論づけられる。

「新民主義」に対して、当時に国民政府と共産党政権はもちろん、臨時政府の官吏もその意味が腑に落ちずに、抵抗感を示すことがあった。たとえば、新民会首都指導部は「新民主義宣伝週間」を行なうなか、部員が「新民主義」の中身を理解できず、部長の宋介に聞いた。そして部長の宋介は「『新民主義』の意味が非常に簡単であり、つまり時代の変わりにつれて、新国家の国民が向きを変え、新しい道を歩まなければならない」と「解釈」した[35]。山西省長兼新民会山西分会長の蘇体仁でさえ「新民精神と言っても一般には判らぬし、私は三民主義が一番いいと思う」と公然に述べた[36]。

「新民主義」に対する認識はこのようであったので、その広がる光景がより奇妙な観を呈していた。例えば、『新民報』は1938年５月12日の「三民主義簡評」と題する社説の中で、「新民主義」を以て三民主義を完膚なきまでに批判したが、1943年１月９日の「孫中山先生大亜細亜主義与大東亜共栄圏」と題する社説の中で、三民主義と「新民主義」の繋がりが強くてその共通点が多いと主張した。山

西省盂県河東村新民会会計係を務めた楊時通は、「新民主義」を指導理念とする「新民会」の意味について、「中国人が新しい民族に入る会」と認識していた。1941年頃に盂県に新民会が設立されたが、実際の活動はほとんど広がらなかったこと、自身も新民会に参加したが一回だけ集会をやっただけで後は消息がなかったと証言した[37]。

「新民主義」とは何であるかについて一言で言えば、「新民主義」は儒家思想を基にし、道家思想を汲み入れた上に、社会進化論、マルクス主義及び近代西洋経済理論などの要素の寄せ集めにすぎず、独創性がなく、矛盾をに満ち、具現しえず、かびくさく、推進者までも腑に落ちずに抵抗を続ける政治理論である。

【注】

1）「喜多少将ニ与フル訓令」防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書　北支治安戦(1)』朝雲新聞社、昭和43年、p. 534。

2）近代以降、北京は1928年に中華民国の首都が南京に置かれて北平と改称されるまで、ずっと中国の首都として「北京」と呼ばれていた。1928年に改称する際に、北京大学における多くの有名な教授は直隷を河北にあらためることが正確だと認めたが、「北京」を「北平」にするのが歴史の立ち返りであり、北方に対する侮辱だと看做し、いろいろな文章を著して反対していた。そして国民政府は「北京」を「北平」に改称したが、「北京大学」を「北平大学」にしていなかった。後の1937年に日本軍に占領され、北京治安維持会の発足に伴い、北京の名称に返した一方、国民政府が引き続き「北平」を呼んでいた。1945年の終戦に国民政府がもう一回「北平」と改称した。今回の挙動には北京大学の教職員と学生を含めて当時国中世論の賛同を得た。1949年に中華人民共和国の樹立に当たり、首都を「北平」に定め、「北京」と改称した。

3）JACAR：A04010434400「外事警察報第188号」（3／77、全文書が77頁あり、その３頁目を参照。以下、同）「外事警察報第188号」国立公文書館。

4）教育史学会編『教育史研究の最前線』日本図書センター、2007年、p. 154。

5）藤澤親雄「新民主義の哲理的基礎」『外交時報』No.796、昭和13年２月号、pp. 1-32。

6）瀧川政次郎「我観新民主義」『改造』1938年６月号、pp. 80-88。

7）大沼喜久男『新民主義の理論と其展開』大東亜文化研究会、昭和17年。

8）八巻佳子「中華民国新民会の成立と初期工作状況」藤井昇三編『1930年代中国の研究』アジア経済研究所、1975年、pp. 349-394。

9）堀井弘一郎「新民会と華北占領政策（上、中、下）」『中国研究月報』1993年１月（pp. 1-20）、1993年２月（pp. 1-13）、1993年３月（pp. 1-6）。

10）陳昌鳳・劉陽「『新民報』に関する研究」『国際社会文化研究所紀要』第６号、龍谷大学国際社会文化研究所、2004年、pp. 16-25。

11）陳昌鳳・劉陽「『新民報』に関する研究（続き）」『国際社会文化研究所紀要』第７号、

龍谷大学国際社会文化研究所、2005年、pp. 13-27。
12）島善高「国立新民学院初探」早稲田大学社会科学学会『早稲田人文自然科学研究』第52号、1997年、pp. 1-49。
13）彭程「新民主義の成立過程について」神戸大学国際文化学会『国際文化学』第21号、pp. 141-163。
14）繆斌：1902年に江蘇無錫生まれ。1921年に南洋公学に入学してまもなく、国民党に入党した。1924年に黄埔軍校の教官を務め、共産党系の「青年軍人連合会」と対抗する国民党系の「孫文主義学会」を発起し、大いに活躍していた。これによって当時に「分共清党」を抱懐した蒋介石に買われ、20歳台でも国民党第二回全国大会の中央委員候補に選出された。後に北伐軍第一軍の副党代表を経て、江蘇省民政庁長に就任した。横領により罷免されたが、何応欽の命を受けて考察のために来日した。帰国してまもなく、盧溝橋事件が勃発し、北京に居残った。新民会の設立に伴いその中央指導部長に就いた。日本軍が新民会に対するコントロールを深めるにつれて、繆は次第に不満を抱くに至り、1942年に新民会を脱退し、汪兆銘政権の立法院副院長に就任した。1946年５月21日に漢奸の第一号として獄中で銃殺された。
15）JACAR：A04010434400「外事警察報第188号」（3-11／77）国立公文書館。
16）繆斌「新民主義」『東亜』1938年第１期、pp. 11-20。
17）八巻佳子前掲文、p. 372。
18）南懐瑾『元本大学微言』復旦大学出版社、2003年、p. 189。
19）「否定の否定」であり、「螺旋状で上昇すること」或いは「波浪式に前進すること」をも通称する。
20）もう二つは「量質または質量の転化」と「対立物の相互浸透」である。
21）『易』之為書也、広大悉備、有天道焉、有地道焉、有人道焉。兼三材而両之、故六。六者、非他也、三材之道也。
22）里見岸雄：1897年～1974年　国体研究家、法学者。1920年早稲田大学卒業、ヨーロッパに遊学して帰国し、1936年に国体研究所を創設した。その後、立命館大学法学部教授に就任、国体学科を創設、主任教授。1956年に日蓮宗系宗教団体立正教団を創始し、徹底的な在家主義をとる。
23）里見岸雄『支那王道論』錦正社、昭和38年、p. 21。
24）里見岸雄前掲書　pp. 200-248。
25）孟子『孟子・梁恵王・上』、p. 59上海古典出版社『中国古典文学叢書』2004年。
26）劉向「新序・善謀」p. 246、上海古典出版社『中国古典文学叢書』2004年。
27）丹羽基二『日本の苗字読み解き事典』柏書房、1994年、p. 67。
28）石坂昭雄『地域・農村工業・工業化：西ヨーロッパにおけるいくつかの事例に即して』ちくま書房、2001年、p. 31。
29）徐楷「説文繫伝」p. 35、上海古典出版社『中国古典文学叢書』2004年。
30）左丘明『国語・越語下』p. 176、上海古典出版社『中国古典文学叢書』2004年。
31）朱熹『朱子語類』p. 512、上海古典出版社『中国古典文学叢書』2004年。

32）梁啓超「新民説」『飲氷室文集』p. 87、上海古典出版社『中国古典文学叢書』2004年。
33）「新生活運動」は伝統的な道徳、特に儒教道徳を基本的な精神とし、国民生活の「軍事化・生産化・芸術化（合理化）」を中心目標とし、「整斎（整然さ）・清潔・簡単・素朴・迅速・確実」を実施原則とし、それを「食・衣・住・行」、つまり人々の日常生活に具現化させることによって、近代国家の達成をめざしたものである。
34）野崎綾子『正義・家族・法の構造変換――リベラル・フェミニズム』勁草書房、2003年、p. 76。
35）新民会首都指導部「新民主義之解説」『青年半月刊』1938年 6 月15日、p. 15。
36）興晋会在華業績記録編修委員会編『黄土の群像』興晋会、1983年、p. 113。
37）堀井弘一郎「山西省における日本軍特務機関と傀儡政権機構――盂県での性暴力に関連して」石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力――大娘たちの戦争は終わらない』創土社、2004年、p. 62。

（ホウ　ティ　国際文化学研究科アジア太平洋文化論コース）